査読論文

板東俘虜収容所のドイツ兵が大麻比古神社境内に造った橋と公園

佐藤 征弥 [1)]・種ヶ嶋 絵理 [2)]・網田 克明 [3)]・川上 三郎 [4)]

1) 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部, 〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1-1
E-mail: satoh.masaya@tokushima-u.ac.jp

2) 大麻比古神社, 〒779-0230 徳島県鳴門市大麻町板東字広塚 13

3) 徳島県立農林水産総合技術支援センター, 〒779-3233 徳島県名西郡石井町石井字石井 1660

4) 鳴門市ドイツ館, 〒779-0225 徳島県鳴門市大麻町字東山田 55-2

Bridges and a Park Made by German Prisoners in The Bandō Prisoner-of-War (POW) Camp

Masaya Satoh[1)], Eri Tanegashima[2)], Katsuaki Amita[3)], Saburo Kawakami[4)]

1) Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University, Tokushima 770-8502, Japan.

2) Ooasahiko-Jinja Shrine, Oasa, Naruto 779-0230, Japan.

3) Tokushima Agriculture, Forestry, and Fisheries Technology Support Center, Ishii 779-3233, Japan.

4) The Naruto German House, Oasa, Naruto 779-0225, Japan.

Abstract

German prisoners in the Bandō prisoner-of-war (POW) camp made bridges and a park in the forest of the Ooasahiko-Jinja Shrine during 1917-1919. Details of the constructions were a 15 m-long wood bridge and five small wood bridges, four stone bridges, road with a total length of 1,130 m, stone embankments, slopes, two flights of stone steps with a length of 8 m and 3 m according to the record written by Adolf Deutschmann who planned and directed the work. Two stone bridges called Doitsu-bashi (German bridge) and Megane-bashi (glasses bridge) remain and the Doitsu-bashi has been designated as a cultural asset of Tokushima prefecture. However, other constructions have been disappeared or became unclear now. In this study, we tried to clarify their precise place and history using an old map of the Ooasahiko-Jinja Shrine, photos and pictures of German prisoners, and interview to an old resident who participated in improvement of the forest around 1970. Results indicated that the road and the stone bridge still remain in some part.

In addition to Adolf Deutschmann we found that Max Bunge was an important member of the work. He has not been noticed in previous studies of the Bandō POW camp, although he was a famous person in the German community in Qingdao by some heroic behaviors, and that he became a mayor of his hometown Heiligenhafen after he was released from the camp. He wrote about beautiful nature of the shrine's forest and about his sympathy to faith of Japanese pilgrims who he saw during construction work.

Keywords: Adolf Deutschmann, Bando, Bandō prisoner-of-war camp, German Bridge, Deutsche Kriegsgefangenenlager, "Die Baracke", Glasses Bridge, Johann Gregorczyk, Karsten Suhr, Max Bunge, Ooasahiko-Jinja Shrine

1. はじめに

鳴門市大麻町板東にある大麻比古神社の境内には、本殿裏の林内に「ドイツ橋（独逸橋）」、「めがね橋」と呼ばれる２つの石橋がある。これらは板東俘虜収容所に収容されていたドイツ兵が1917年から1919年にかけて造ったものであり、歴史を偲ばせる名所として多くの人が訪れている。ドイツ橋は2002年に鳴門市指定史跡に指定され、2004年には徳島県指定史跡に指定された。２つの石橋は、ドイツ兵たちが橋造り・公園造りの一環として築いたものである。発端は収容所近くの板東谷川に架かる橋が流失した際に、収容所と板東村を結ぶ新たな連絡路を設ける目的で、大麻比古神社の境内に木の橋と道を作ったことであった。その後ドイツ兵の中に、美しい大麻の森にもっと広い「公園」を作ろうという提案をする者があり、公園造りが開始された。その経緯は、橋や公園の設計を担当したアドルフ・ドイッチュマン（Adolf Deutschmann）築城少尉が、収容所で発行されていた新聞『ディ・バラッケ』[1]に記している[2]。作業を担当したのは「橋造りの人たち」と呼ばれる工兵を中心としたグループであり、彼らは石橋、木の橋、道、傾斜路、石段を造った。これらのうち橋については、６つの木橋と４つの石橋を造ったが、上記の２つの石橋以外は残っていない。また、道、傾斜路、石段についても、侵食や樹木の成長により流されたり壊れたりし、境内の整備によっても失われていった。また、昭和40年頃には、地元の人々によりドイツ橋およびめがね橋周辺や丸山の大規模な整備が行なわれ、道や石段が造られたが、現存するものがドイツ兵が造ったものなのか、それともその時の作業により新たに設置されたものか分からなくなっているものもある。

本研究はドイツ兵が造った公園がどのようなものだったのか具体的に明らかにすることを目的として行なった。ドイツ兵が残した記録や写真、地元の古老への聞きとり、そして今回の調査の過程で見つかった大麻比古神社の古境内図等を基に、ドイツ兵が何をどこに造ったのかある程度推定することができたので報告する。

また、調査を進めていくうちに、ドイツ兵たちがこの橋造り・公園造りにどのような思いを込めて作業していたのか資料から読み取ることができたので、併せて記すことにした。特に、ドイッチュマンとは別に、この作業の精神的支柱といえる存在であったと思われる人物について取りあげる。その人物が“M.B.”というペンネームで『ディ・バラッケ』に書いた寄稿文「大麻神社境内の朝の気分」からは、当地の自然と人々の信仰心への共感が読み取れる[3]。また、M.B.はドイツ兵の慰霊碑が造られた際の記念式典の様子についても『ディ・バラッケ』に書いている[4]。本研究によりM.B.がマックス・ブンゲ（Max Bunge）曹長であると特定することができた。彼は、青島ドイツ人社会において英雄と称えられた人物であり、収容所から解放された後、帰国して故郷の町ハイリゲンハーフェン（Heiligenhafen）で町長を12年務め[5]、地元では「MB父さん」と慕われた[6]。彼については今日まで板東俘虜収容所を題材にした一連の調査や作品群において注目されることがなかったが、このように傑出した人物であり、橋や公園の保存・管理にあたり彼の存在についても記憶に留めるべきであると考える。

2. 資料および調査方法

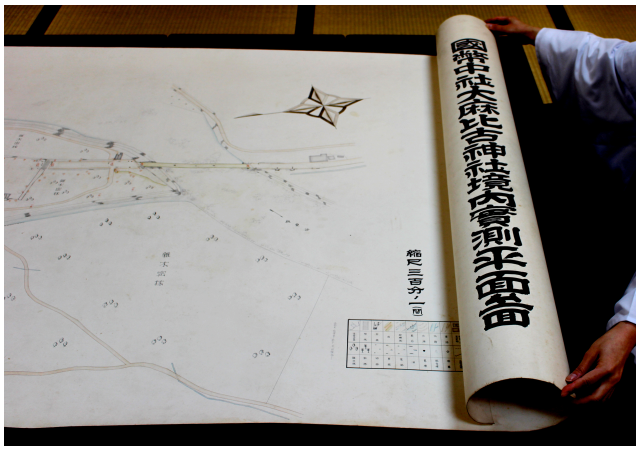
ドイツ兵に関する資料

ドイツ兵が残した記録として、収容所内でドイツ兵たちが発行した新聞『ディ・バラッケ』[1]、『日刊電報通信』[7]、そして鳴門市ドイツ館所蔵の写真資料を参照した。

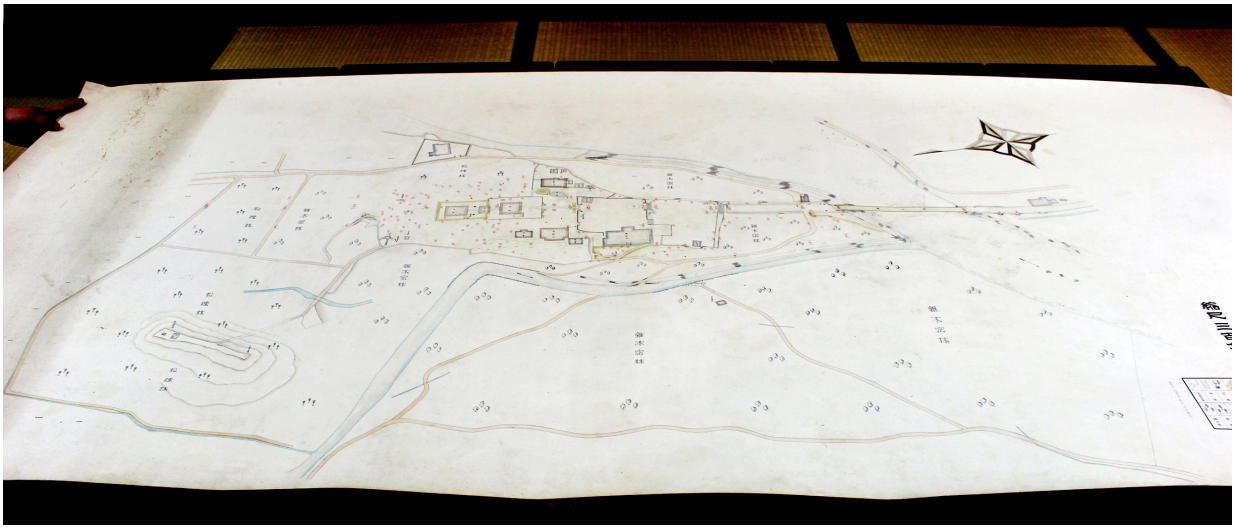
大麻比古神社の境内図

大麻比古神社の神庫に古い境内図が２点収蔵されていた（図1）。1つは厚紙に、もう1つはトレーシングペーパーに描かれている。大きさは厚紙の方が縦114.5 cm、横255.0 cmであり、トレーシングペーパーの方は、全体の大きさが縦115 cm、横205 cm、図の縁取の大きさが縦110.2 cm、横200.5 cmであった。２つの図面の内容に違いはないが、厚紙は裏に題字「国幣中社大麻比古神社境内實測平面図（図の異字𤰈が使われている）」と記されているのに対して、トレーシングペーパーの方は題字が境内図と同じ面に

a



b



c

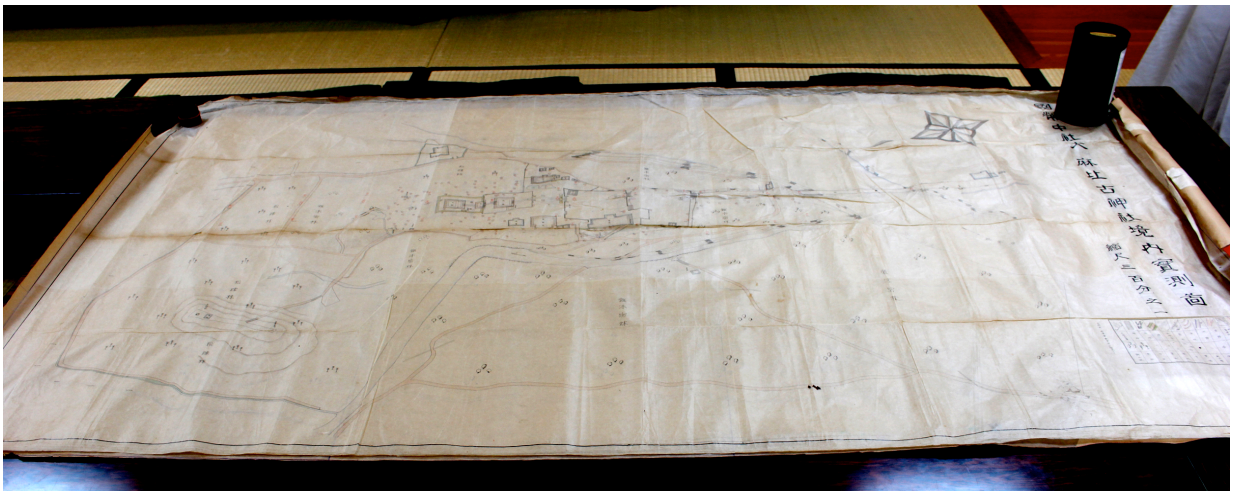
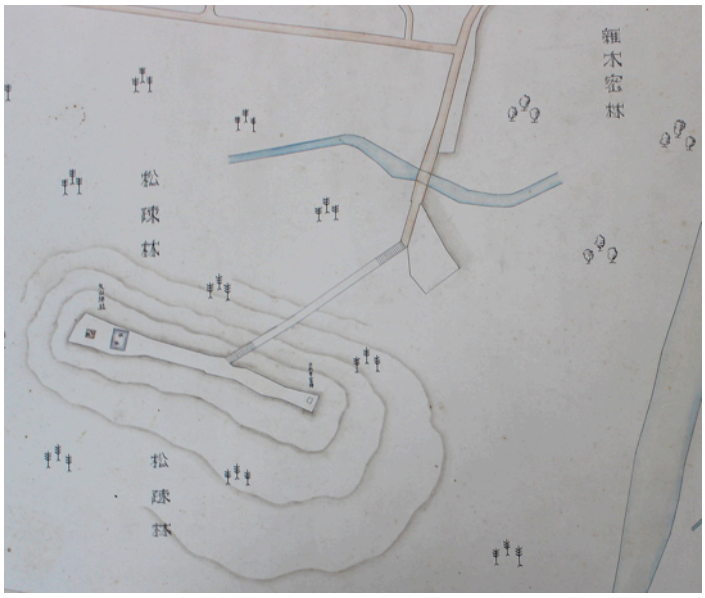


図１　大麻比古神社から見つかった古境内図

古境内図は２枚あり、厚紙に描かれたもの（a, b）を原図としてトレーシングペーパーに写したもの（c）が作られたと考えられる。

a



b

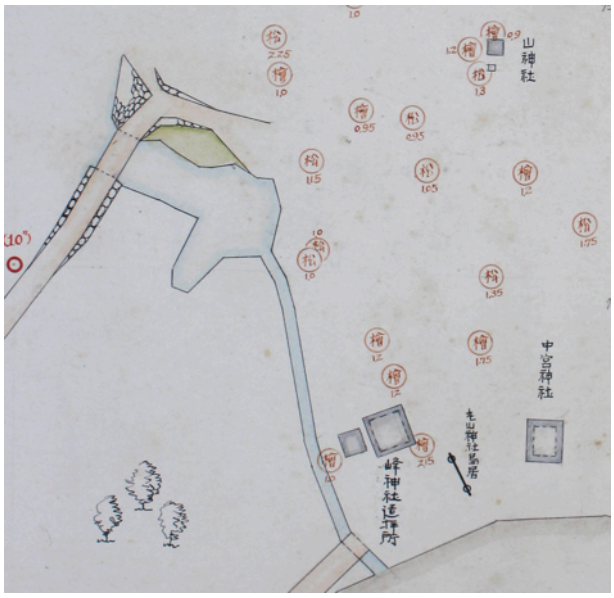


図２　古境内図における本殿北側の林地の描写

a：丸山及びドイツ橋周辺。丸山の林相は松疎林と表されている。b：めがね橋周辺。赤字で松や檜が記され、幹の太さの計測値も示されている。

記されている。厚紙の方が彩色も鮮やかであり、こちらが原図であろう。トレーシングペーパーの方はそれをなぞって作製したものと考えられる。図の縮尺は 1/300 と明記されている。これら 2 つの境内図の製作時期は不明だが、ドイツ兵が造ったドイツ橋およびめがね橋とそれが架かっている池（現在は「心願の鏡池」と呼ばれている）が描かれていることから 1919 年以降の製作である。また、太平洋戦争で供出した戦利品大砲が描かれていることから終戦前の作成であると分かる。

トレーシングペーパーに描かれた境内図は、それを青焼で複製した図面と一緒に筒に収められていた。青焼の図面には補強用の紙が貼られており、その紙には「支那事変」の文字が記されていた。「支那事変」の呼称は、以前には北支事変と称していたものを昭和12年９月２日の閣議決定、事変呼称ニ関スル件「今回ノ事変ハ之ヲ支那事変ト称ス」により変更されたことから、この補修がなされたのはそれより以前という可能性は低い。

これらの古境内図が作成された目的についても不明であるが、特徴として有用樹木の情報が詳細に記されていることが挙げられる。境内の林地は「松疎林」と「雑木密林」に分けられ、それぞれ針葉樹と広葉樹のマークが描かれている（図 2a）。また、境内に生えている多数の樹木について樹種と大きさが詳しく記されている。拝殿北側の林内は松と檜ばかりであるが（図 2b）、建物の近くには神木のクスを初めとする楠や、櫻（桜）、紅葉、樫、杉、木斛（モッコク）という文字が見られる。このような樹種の区別から、この境内図は神社が有する資産の報告の目的で作られた可能性が考えられる。

古境内図は写真撮影し、Adobe Illustrator を用いてトレース図を作成した（図３）。現在の地形と比較しつつ、goo 地図の距離・標高測定機能を用いて、ドイツ兵が整備したと考えられる道の長さを計算した。

また、現在の境内図は、平成３年に（株）鳴門測量設計が製作した 1/500 縮尺の境内図を参照し、Adobe Illustrator により描き直した（図４）。

図３　古境内図のトレース図

厚紙に描かれた古境内図を写真撮影し、Illustrator により描画した。図２でみられた林地の１本１本の樹はこの図からは削除してある。また、原図では図中の記号の説明の表が右下に描かれているが、それもここでは削除してある。また図中の文字は、似たフォントで置き換えてある。

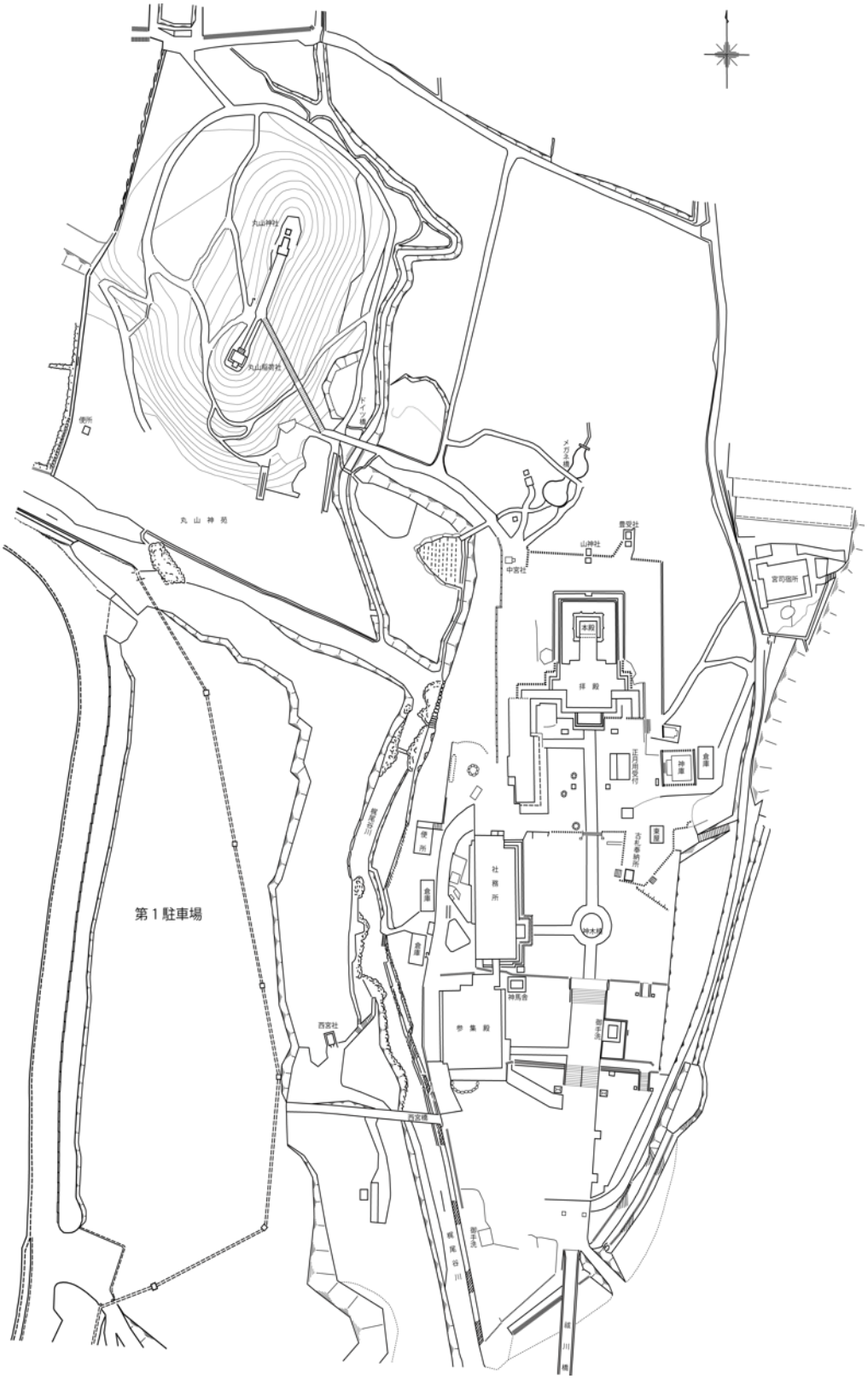


図４　現在の境内図

1991 年（平成 3）に作成された境内図を基に、祓川橋より北の部分をトレースして作成した。

実地調査

2014 年 8 月 29 日、9 月 30 日、10 月 7 日、11 月 8 日、2015 年 3 月 26 日、4 月 18 日、7 月 11 日に大麻比古神社境内の実地調査を行なった。また、2014 年 11 月 8 日および 2015 年 3 月 26 日に古境内図の写真撮影を行った。

聞き取り調査

地元の古老で、昭和 40 年前後に地元有志らによって丸山の公園化やドイツ橋・めがね橋を整備した際にその作業に携わった麻田功氏から当時の作業やそれ以前の境内の様子について聞き取り調査を行った。2014 年 10 月 1 日は、現地にて立ち会いのもとお話をうかがい、翌 10 月 2 日にもお話をうかがった。また、前大麻比古神社宮司（現名誉宮司）・金倉文雄氏からも境内整備の経緯と状況について 2014 年 10 月上旬に書面で尋ね、回答をいただいた。

3. ドイツ兵が造ったもの

3.1. 設計者ドイッチュマンの記録

『ディ・バラッケ』第10号（1917年12月2日）に、1917年の収容所の出来事として、9月13日にドイッチュマンの指揮の下で大麻比古神社の橋の建設が開始した旨が記されている[8]。後に、彼自身が“A. dt.”の署名でこの橋造り・公園造りについて『ディ・バラッケ』1919年9月号の中の「二年間の橋梁建設」という寄稿文に詳細に記録している[2]。彼が、これらの仕事を担当したのは陸軍築城少尉であったためである[5]。ドイッチュマンはこの他に、板東俘虜収容所が発足して間もない1917年4月18日に始まった収容所内の道路工事も指揮している[8]他、ドイツ兵慰霊碑の設計も手伝っている[9]。

この寄稿文は、「I. 第一の橋」「II. 神社の公園」「III. 最後にできた橋」の3章からなり、おおよそ製作順通りに記されている。以下にその要点を記しておく。

I.　第一の橋

最初に造ったのは長さ 15 m の木製の橋である。建設の目的は、収容所の南の祓川（正しくは板東谷川）に架かっていた橋が何度も押し流されるので、収容所と板東村を結ぶ非常用連絡路として新たに橋を造ることであった。1917 年 9 月 13 日、工兵を中心として他の兵種の者も加わった 33 名が橋を架けるために「大麻神社の荘厳な森」に初めて入った。橋の建設をはじめ次のような工事を行い、11 月の終りに完成した。

造ったもの

(ア) 長さ 15 m の木橋

(イ) 幅約 40 cm の歩道を、橋の手前 80 m と橋の向こうの 135 m のあいだを幅 1.75 m に拡げた。

(ウ) 水車用の水路をまたぐ 1 つの小さな橋

(エ) 橋に続く 1.4 m 幅の車道

II.　神社の公園

上記の橋が完成すると、美しい大麻の森にもっと広い「公園」を作ろうと提案する者があり、大方の賛意を得た。彼らが造った「森の美化に寄与する多くの建造物」は、（ア）の 15 m の木橋の他に次のようなものである。

（オ）総延長 1,130 m、幅 1.5〜1.75 m の道路（上記（イ）を含む）

（カ）石の堤防

（キ）傾斜路

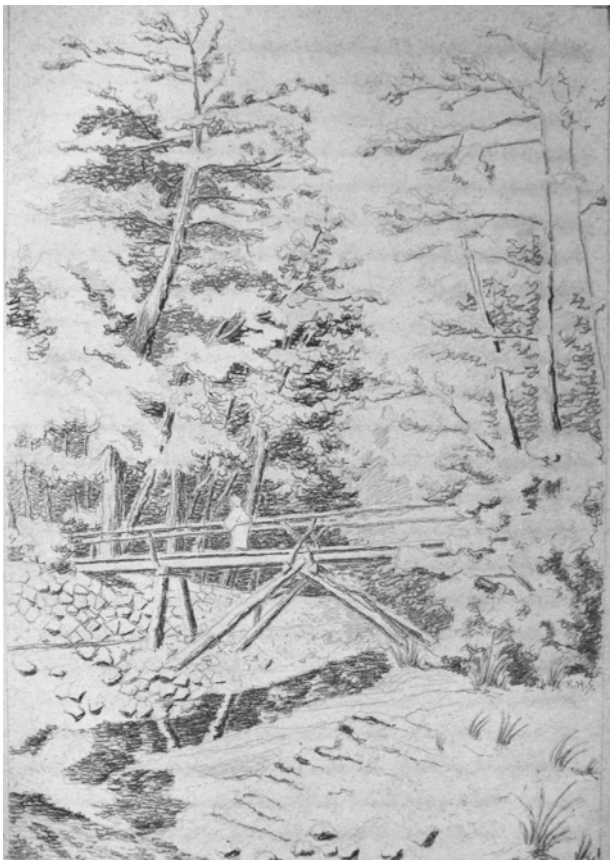
（ク）8.0 m と 3.0 m の 2 つの石段

（ケ）5 つの小さな木橋（上記（ウ）を含む）

（コ）3 つの小さなアーチ型の石橋

（サ）ドイツ橋（III で述べているのもの）

a



b

c

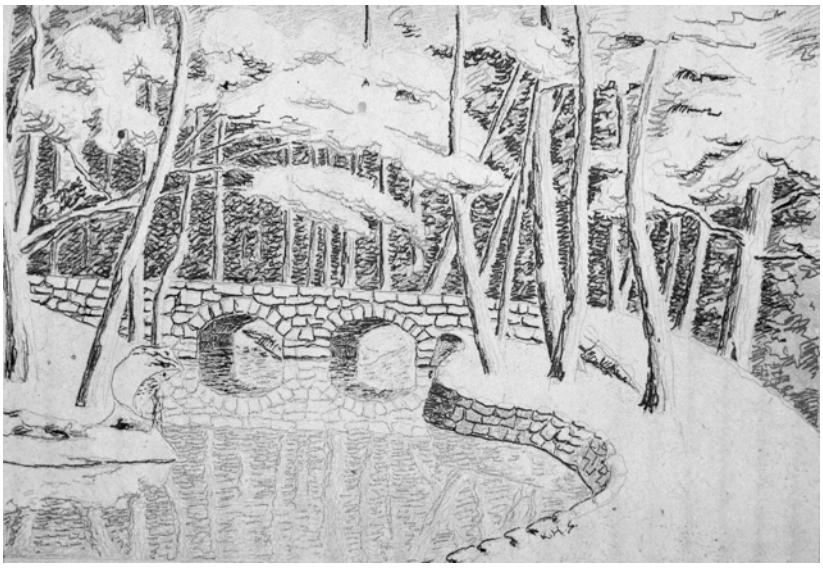


図５　ズーアによる橋のスケッチ

『ディ・バラッケ』の寄稿文「二年間の橋梁建設」に挿入された３枚のスケッチを示す。a：15 m の木橋、b：ドイツ橋、c：めがね橋と池。

III. 最後にできた橋

この章では上記（サ）の現在ドイツ橋と呼ばれている石橋の建設について詳しく書かれている。そのあらましは次の通りである。大麻の森の北西の隅に位置する丸山は、3〜8 m の深さの谷によって神苑の他の場所と隔てられており、簡単な木製の橋が架かっていたが、1918 年秋の嵐でその橋が崩壊寸前になった。そこで、ドイツ兵たちはこれまでに培った腕前を発揮するのに相応しい仕事をしようと考え、木橋に替わって堅固な石橋を架けることにし、1919 年 4 月から建設を開始した。セメントはなく、全て石を積み上げて造り、神社の近くの石が不足すると、毎日何度も鳥居谷まで石を取りに行き、後にはもっと上流まで取りに行った。側壁を含めて橋の建設のために 75 m^3 ほどの石を使った。橋の構造は、谷底を横切る厚さ 1 m の基部を置き、その上に迫台（せりだい）を築いた。張間（はりま）は 1.60 m、高さは迫台（アーチの端）の所で 1.70 m、頂（アーチの最高点）では 2.50 m である。

この橋は、工事中から住民の関心事となり、見学者が集まっていた。1919 年 6 月 27 日、宮司が要石を打ち込んだ。完成した橋は、はじめに想定したよりも立派で美しいものとなり、周囲の景観にぴったり合っている、とドイッチュマンは出来映えに満足そうに記している。

なお、この寄稿文には、カルステン・ズーア（Karsten Suhr）工兵によるスケッチが 3 枚添えられている（図５）。1 枚はこのドイツ橋であり、他の２枚は最初に造った長さ 15 m の木橋とめがね橋である。

以上、ドイツ兵が造ったものを述べてきたが、彼らが行ったのは散歩道を整備する土木工事であり、今日われわれが「公園」と聞いてイメージするような、遊具が置かれた遊び場といったものとは違っている。しかしドイッチュマンはこの寄稿文の中でここを「神社の公園（Tempel-Park）」と呼び、公園造りと無関係なドイツ兵たちもまたここを「大麻公園（Oasa-Park）」と呼んでいた[10]。Park という言葉は、ゲルマン語由来で「囲われた土地」を意味し、木々が立ち並ぶ中を散歩したり芝生の上で憩うことができるような広いスペースを指す言葉であり、ドイツ兵たちがここを Park と呼んだのはまったく自然なことである。

3.2. ドイッチュマンの記録の検証

前節で紹介したドイツ兵が造った建造物（ア）〜（サ）は、境内のどこに造られたのだろうか、そして現在どうなっているのだろうか。大麻比古神社の古境内図や古老の話、およびドイツ館所蔵の写真を基に以下に考察する。

（ア）長さ 15 m の木橋

この橋は、ドイッチュマンの記述から、神社の東を流れて板東谷川と合流する椎尾谷川に架けたと推定されるが、現在はなくなっている。古境内図にも描かれておらず、古境内図が描かれた時には、すでに壊れたか流出してしまったと考えられる。しかし、『ディ・バラッケ』の中に、大雑把な地図ではあるが、木こり団の活動や地学巡検の寄稿文[11]の中にこの橋と思われる橋が描かれており（図６）、その位置は現在西宮橋が架かっている位置と近いことが分かる。しかし、後でも述べるように橋と一緒に造った道、石段、傾斜路との位置関係からすると、それよりもやや北に在ったと推測される（図８）。

この木橋の外観は、ズーアのスケッチに見ることができる（図５a）。また、この作業に携わったと考えられるヨハン・グレゴールチック（Johann Gregorczyk）が所持していた写真[12]にこの木橋の建築中の様子を写したものがあった（図７a）。収容所で撮影された彼のポートレート写真と照らし合わせると、写真を所持していたグレゴールチックは写真右上の鋸を持って橋に腰掛けている人物であると思われる。この写真は、川の中に立っている人物の影の向きや、水面の波紋の形状から、北側から橋を撮影したことが分かる。写真右上のグレゴールチックと思われる人物の後ろに明るく写っているのは西宮社の社であると思われる。両岸の高さが少し違うために川を渡す木の柱が水平ではなく、右（西）が高くなっている。ズーアのスケッチでもやはり右側が高く描かれているので、橋を北側から見て描いたと考えられる。

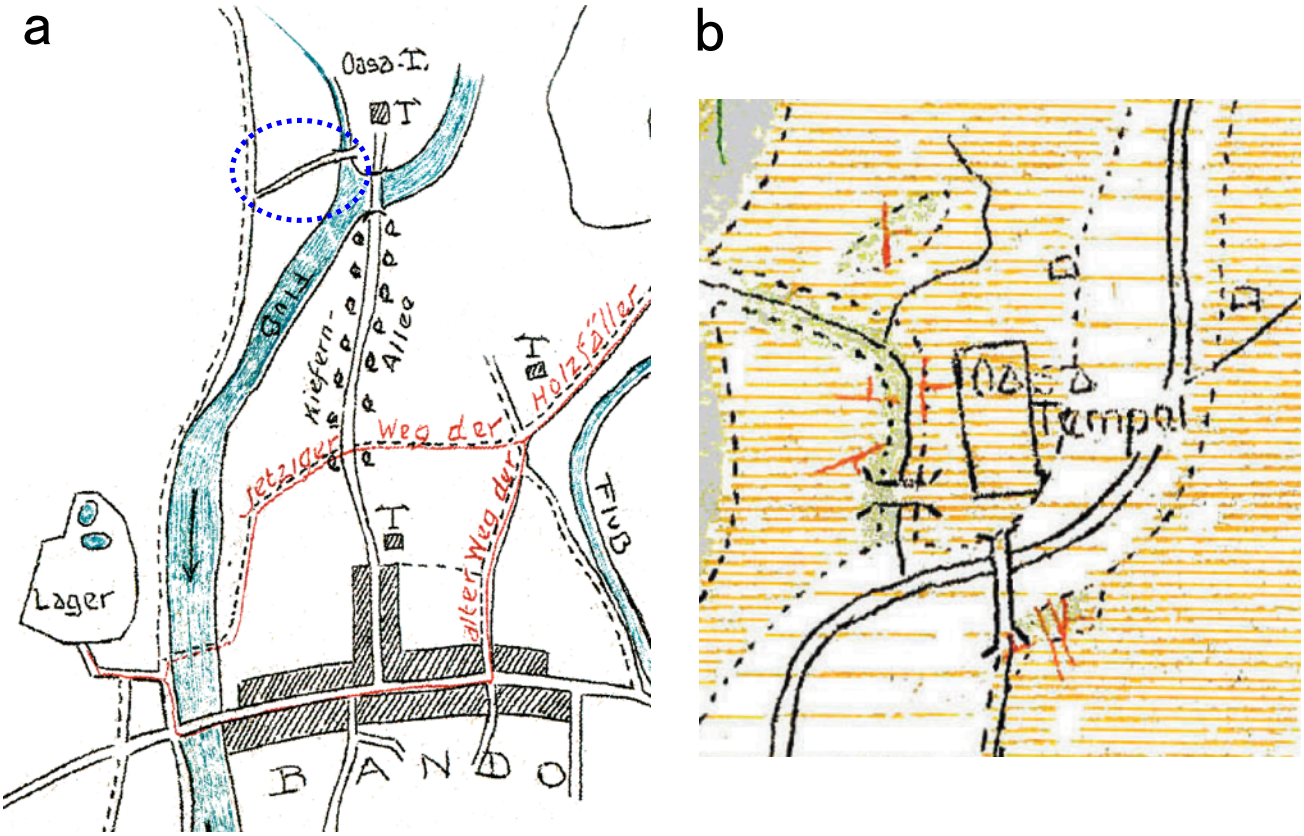


図６　15 m の木橋の存在を示す『ディ・バラッケ』における大麻比古神社周辺の地図

a：「木こり団創設１周年に寄せて」の中の地図。左下の Lager は収容所を、上の Oasa.T.が大麻比古神社を示している。松並木の参道と神社を結ぶ祓川橋とは別に、ドイツ兵が造ったと考えられる 15 m の木橋と道が描かれている（青い点線で囲んだ部分）。b：「地学巡検　第３部（大麻神社周辺）」の中の地図。15 m の木橋と考えられる橋が描かれている他に、丸山とその東側に存在するドイツ橋が架かる谷川が描かれている。

グレゴールチックの写真には、木橋を作成中と思われる写真がもう一枚ある（図７B）。写真の左下には木橋が写っており、右下には伐り倒した木と、橋に載せる板を造っていると思われる二名の兵士が写っている。中央に写っている長袖の軍服姿の人物が作業の指揮をとったドイッチュマン少尉であろう。彼の左には川があり、足下の丸い石組みは護岸のために積んだように見える。木橋は計６つ造っているが、深い谷川に架かっていることから、前の写真と同じく最初に造った 15 m の木橋であると考えられる。写真の左前に大きな松の木が写っているが、幹が根元で分かれていて、一方は垂直に伸び、もう一方は斜めに伸びている。この木はズーアのスケッチで橋の左に描かれた高い松と根元の形状が一致し、位置的にも合致するので、写真は橋の東側で撮影されたものと考えられる。

（イ）幅約 40 cm の歩道を、橋の手前 80 m と橋の向こうの 135 m のあいだを幅 1.75 m に拡げた

ここに記している「橋の手前」「橋の向こう」とは、橋を渡る前と渡った先を意味しているのではなく、橋の収容所側（東岸）において、収容所に近い橋の南側を「手前」、収容所から遠い橋の北側を「向こう」と表現しているものと考えられ

a

b

図７　木橋作成中の写真

収容所にいたヨハン・グレゴールチックのアルバムから見つかった 15 m の木橋作成の様子を撮影した２枚の写真。

る。古境内図では図８の⑧と⑦で示した道が、それぞれ「橋の手前」の道、「橋の向こう」の道にあたると考えられる。古境内図の道の長さを、現在の地図を用いて距離を計算すると、⑧の道は 134 m、⑦の道は 118 m であり、ドイッチュマンが書いた数値と若干異なっている。その理由として、ドイッチュマンの記録した数値は、道そのものの長さではなく、拡張した部分の長さであること、さらに、存在したはずの橋と道⑦⑧を繋ぐ道が古境内図では描かれていないことが挙げられる。

（ウ）水車用の水路をまたぐ１つの小さな橋、（ケ）５つの小さな木橋、（コ）３つの小さなアーチ型の石橋

ここではすでに（ア）で述べた 15 m の木橋を除いた木橋と石橋についてまとめて述べることにする。古境内図では、川や水路を青く彩色してある。道がその上を通過している箇所は、点線などで橋の存在が示されている（図 9）。このような所は、石橋であるドイツ橋とめがね橋を除くと５箇所ある。これらのうち、橋①は境内の外であるため手を加えていないと考えられ、橋⑦についてもドイツ兵が工事を始める前から存在していた道であることから、橋はすでに在ったと考えられる。よってドイツ兵が作った可能性があるのは、③⑤⑥の３つである。（ウ）の「水車用の水路をまたぐ１つの小さな橋」は、文脈からすると（ア）（イ）の近傍にあると考えられるので、⑤か⑥であったと思われる。

（コ）の３つの小さな石橋は、「小さな」と表現している点と、ドイツ橋について別個に記していることから、ここにドイツ橋は含まれない。ドイツ橋を入れて石橋は４つ造ったことになる。ドイツ橋とめがね橋は『ディ・バラッケ』にズーアのスケッチがある（図 5b,c）。スケッチにはめがね橋の下に池があり、水面に反射する木々が描かれているので、池も一緒に造ったものと考えられる。あと２つの石橋は消失した。どこに造られたかは不明だが、１つはドイツ橋やめがね橋に近い位置にある橋③の可能性が高いだろう。

古境内図には示されていないが、現在、石組みで造られた細い溝が２箇所で道③を横切っている（図 10 の溝①②、図 11）。溝①には、現在小さな丸木橋が架けられている（写真）。ドイツ兵が造った木橋あるいは石橋が、これらの溝に架けるものであった可能性もある。これらの溝は、途

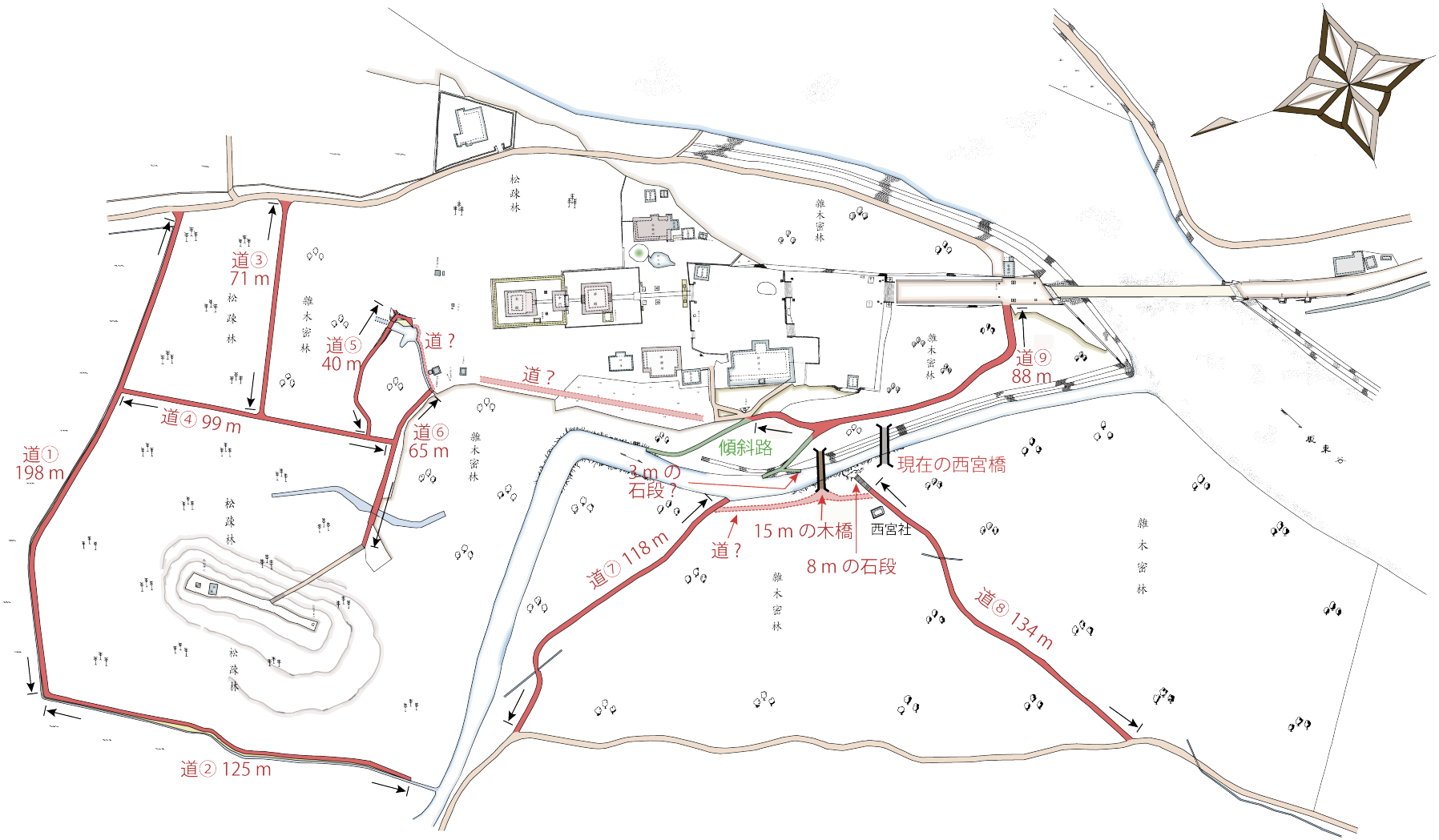


図８　ドイツ兵が整備した 15 m の木橋、道、傾斜路、石段

ドイツ兵が最初に造った 15 m の木橋の予想される位置と現在の西宮橋の位置を示した。また、古境内図に描かれた道のうち、ドイツ兵が整備したと考えられる部分を赤で塗って示している。また、古境内図にはないが、ドイツ兵が整備したと予想される道はピンク色で示している。傾斜路はを緑で塗って示した。また、傾斜路を緑で、石段を矢印で示している。

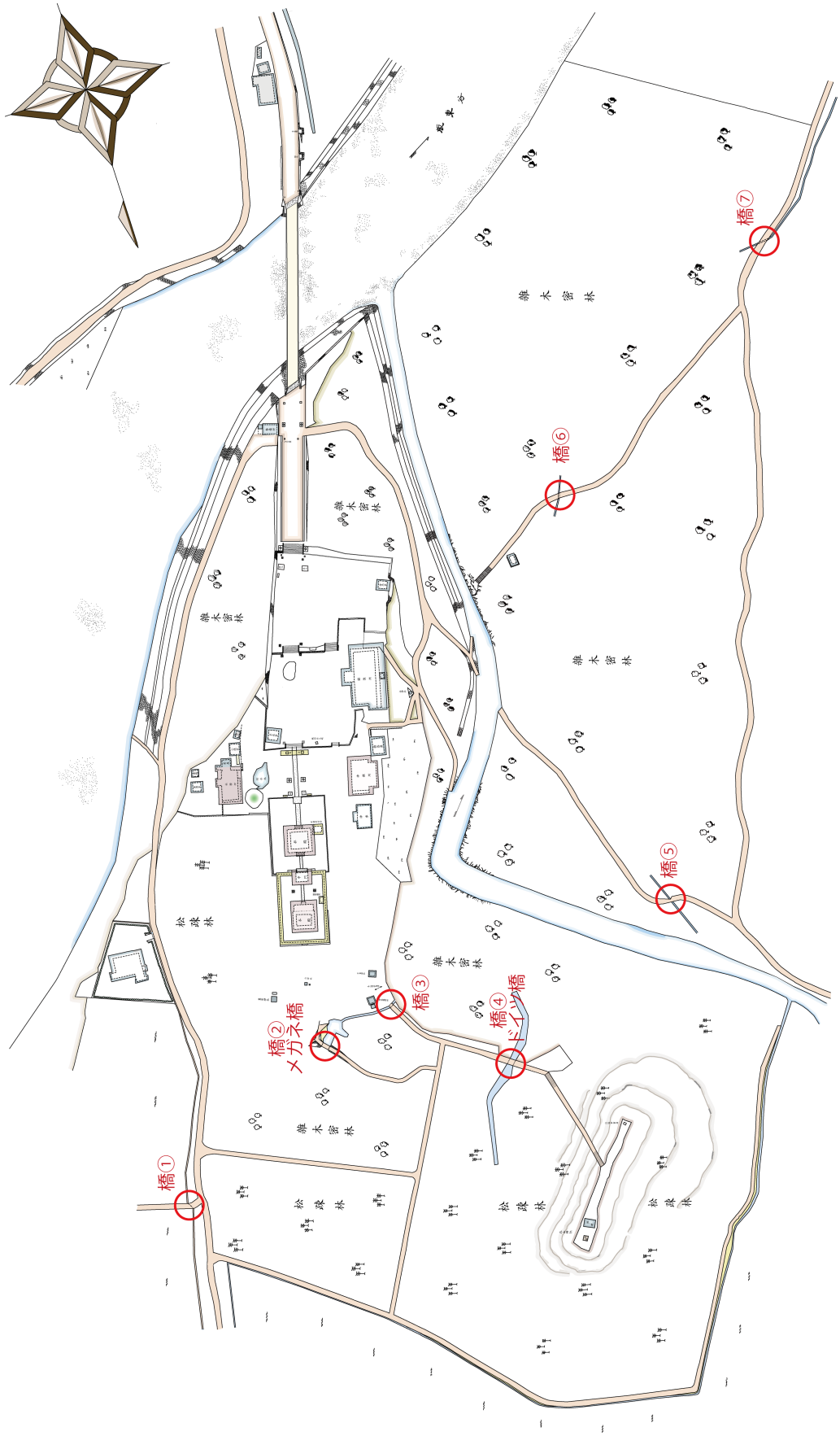


図９　古境内図に描かれた橋

橋と分かるように描かれている箇所を赤丸で示している（祓川橋は除く）。

図 10　境内北部の現在の様子

現在の境内図（図 4）においてドイツ兵が整備したと考えられる道を茶色で示した。点線で示した道は現在の境内図には描かれていないものの、道は存在しているためこの図には示した。また、石組みでできた溝が３箇所存在している。

切れており、どこに繋がっていたのか不明だが、溝①と③はめがね橋が架かる池に水を供給する目的で、境内の外から水を引くために設けられ水路の一部であった可能性が考えられる。

（エ）橋に続く 1.4 m 幅の車道

これは（ア）の 15 m の木橋と祓川橋を結ぶ道（古境内図では道⑨）を指していると考えられる。ドイツ兵が築いた木橋がなければ車道を設ける必要ない場所であるので、ドイツ兵が造った道であると推測される。

（オ）総延長 1,130 m、幅 1.5〜1.75 m の道路（上記（イ）（エ）を含む）

ドイツ兵が造ったと推測される道を、古境内図おいて赤く示したのが図8である。（イ）（エ）ですでに述べたように木橋を通るために設けた道の他に、公園のために境内北部の林内に設けられ

a

b

c

図 11　境内北部の林地における石組みのある溝

a～cは、それぞれ図10の溝①～③の写真である。cの溝は土や落ち葉で埋まっているが、左上のめがね橋に繋がっている。

た道が含まれる。境内の東の境の道は、境内の外側であり、すでに存在したと考えられる。また、古境内図ではドイツ橋付近から丸山頂上に繋がる石段が、道と同じように彩色されているが、ドイッチュマンの記述によれば、すでに存在していた石段である。赤く記した道の長さを合わせると938 mである。ドイッチュマンの記した数値1,130 mに満たないのは、古境内図に描かれていない道があったと考えられる。（イ）で述べたように15 mの木橋に繋がる道があったと推測されるが、その他にもズーアのスケッチに描かれているようにめがね橋の架かる池と水路に沿って道が設けられたと考えられる。さらに、古老のお話によると、かつて祓川橋から神社の建物群の西側を通って丸山神苑へ続く大八車が通れるくらいの幅の道があったという。これらの道についても図8に示したが、これらを合計すると道の長さは1,126 mとなり、ドイッチュマンが記した1,130 mとほぼ一致する。しかし、例えば道⑧のように134 mの道を、ドイッチュマンは拡張したのは80 mと記している点など正確でない所も多々あると思われる。また、丸山の南側には道が示されていないが、公園を造るという目的からすれば、丸山を周遊できるように道を整備するのが自然と思われる所もある。新たな資料が発見され、より正確に検証されることが望まれる。

（カ） 石の堤防

古境内図では河岸に石の堤防が描かれている。しかしドイツ兵が手をつけなかった場所にも石の堤防があり、どこをドイツ兵が整備したのかは不明である。（ア）の木橋製作中のグレゴールチックの写真（図 7）には、右側の岸では木橋の支柱を固定する目的で石を積み上げているのが分

かる。また、左岸では支柱の部分だけでなく、さらに広い範囲に護岸の目的で石を並べられており、「石の堤防」はこのあたりを指していると考えられる。また、（サ）のドイツ橋が架かる谷の橋の周囲に石の堤防も含まれていると考えられる。

（キ） 傾斜路、（ク）8.0 m と 3.0 m の２つの石段

古境内図には、神社の建物から椎尾谷川へ下りる道が描かれており、これが傾斜路である可能性が高い（図８の緑色で示した箇所）。この傾斜路は、15 m の木橋や石の堤防の工事の際に、林と川を行き来するために設けたものと考えられる。

8.0 m の石段は、現在、西宮社から椎尾谷川に降りる石段（図 12a）が長さは 8.3 m であり、ドイッチュマンが記した長さとほぼ一致する。この石段は古境内図にも描かれており（図 8）、ドイツ兵が造ったものと思われる。しかし、セメントで固定してあり、後に手を加えたことが明らかであり、どの程度ドイツ兵が作った状態を留めているのかは不明である。3.0 m の石段の方は、古境内図には見当たらない。しかし現在、長い石段の対岸に長さ 4.0 m の石段が存在する（図 12b）。ドイッチュマンが記した長さよりも 1.0 m 長く、これもセメントが使われていることから、たとえこれがドイツ兵が造ったものだとしても、後にかなり手が加わっている。石段がこの位置であるとすれば、傾斜路と同じく橋や堤防の工事のために築いたものであろう。

なお、現在境内にはドイツ橋のすぐ南にも、谷の両岸にそれぞれ長さ 7.6 m と 4.5 m の石段が存在する。しかし、この２つの石段は昭和 60 年頃にドイツ橋を見学するために新たな橋を設けた際に一緒に設置したものであり、ドイツ兵の製作によるものではない。

（サ） ドイツ橋

ドイッチュマンは、丸山は谷によって神苑の他の部分から隔てられていると記している。現在でも丸山の東側は谷になっているが、古境内図では橋の近傍だけが川のように描かれている（図 3）。当時の状況がどうなっていたのかは分からないが、地学巡検の寄稿文の図では丸山の南東から丸山の東を通って椎尾谷川に合流する川（あるいは谷筋）が示されている（図 6b）。ドイッチュマンは「川」ではなく「谷」と表現しており、さらには、橋の建築にあたって水が流れていては基礎部分に石を厚く敷き詰めることはできないことから、大雨の後に水が流れることはあっても普段は水が流れていなかったと考えられる。

a

b

図 12　板東谷川の両岸の二つの石段

a：東岸の西宮社から続く長さ 8.3 m の石段。b： 西岸の長さ 4.0 m の石段。

3.3. 作業環境

ドイッチュマンの「二年間の橋梁建設」によれば、橋造り・公園造りの作業環境は恵まれたものではなかった。作業開始当初は、ドイツ兵たちによる自発的な労働だったものの賃金が支払われることになっていて、小遣い銭稼ぎのために作業に志願する者が多かった。しばらくして総額20円の賃金が支払われたが、一人当たりの配分は僅かであり、またその後の作業に賃金が支払われないことが分かると参加を止める者が出た。また、使える道具も僅かであり、一本の鋸と木を削る釿（ちょうな）、いくつかのシャベルとつるはしのみであった。これらの道具はグレゴールチックの写真でも確認できる（図7）。彼らが作業を続けた理由は、『ディ・バラッケ』のM.B.署名の寄稿文「大麻神社境内の秋の気分」によれば「この古い林の中に道と橋を造り、みずから望んだ労働で体を鍛え、遠くにある打ちひしがれた故国のきびしく大いなる苦難を救うために、筋肉を鍛えているのだ。」というものであった。また、ドイツ兵主催の展覧会のために写生に出かけた者が「公園造り・橋造りたち」に会う様子が、次のように記されている。「身も心も新鮮にしようと（身体は一生懸命働くことで、心は、もう少し続きそうな戦争も橋ができる頃にはきっと終わるという穏やかな確信によって）、よい天気の下で「橋作り」に励んでいる人、その人も働きながらわれわれの芸術家を見ることができた。」[13)]

橋造り・公園造りの様子がうかがわれる面白い資料がある。1919年6月22日の『日刊電報通信』[7)] 第66号に、橋造りたちの間で「カエル捕り」というスポーツが流行っているが、カエルは無害どころか蚊を捕ってくれるのでやめなさいというドイッチュマンによる詩が載っている。彼は現場で指揮をとっているのだから、現場でそのように言えば済むことであるし、「カエル捕り」に夢中になっている者たちを内心は良く思っていなかったのかもしれないが、一方で仕方のないことだと理解もしていたのだろう、その状況をユーモラスな詩にしたものと考えられる。また、同年10月1日の『日刊電報通信』[7)] 第160号には高木大尉が遠足に出かける者および橋造りの人に向けて、きのこ採集は許可できないと通達している。これは住民が採るきのこをドイツ兵が採るのを禁じたものである。

ドイッチュマンは「二年間の橋梁建設」の中で、ドイツ橋のアーチが繋がり、もう少しで完成という段階になって、休みを取ろうとしなかった橋造りたちが仕事をサボり始め、1週間まるまるサボることもあったが、そんな折りには葉巻をやり取りして仕事を促したと記している。作業は遅れたものの、ドイッチュマンの表現によれば「時折り橋造りたちは暗礁に乗り上げそうになったが、危険を回避することに何度も成功した」。このようにして彼らの橋造り・公園造りは成し遂げられた。

4. 英雄マックス・ブンゲ（Max Bunge）

これまで述べてきたように、ドイッチュマン築城少尉が橋と公園を設計し、作業を指揮したことは板東俘虜収容所関係の資料や書籍で紹介されている[14)]。本研究において新たにマックス・ブンゲ(Max Bunge)曹長が、この作業に貢献していたことが判明したので紹介しておきたい。

前章でも述べたが、『ディ・バラッケ』の 1919 年 9 月号には、ドイッチュマンの「二年間の橋梁建設」とともに前に M.B.の署名で書かれた「大麻神社境内の秋の気分」という寄稿文が載っている。これも橋造り・公園造りについて書かれたものだが、作業そのものよりも、キジが舞い小鳥が唄う赤松の森の朝の様子や、時折り訪れる遍路の参拝者の様子が、詩情豊かに描写されている。筆者 M.B.が誰なのか、これまで調べられてこなかったが、M.B.による寄稿文はこの他に『ディ・バラッケ』に 3 つあり、それらから得られる情報から人物の特定を行なった。

① 1918 年 2 月 3 日の第 19 号に「1918 年 1 月 26 日の第 5 中隊の皇帝誕生日祝典」を寄稿している[15)]。「私は工兵隊と第 5 中隊のお祝いに招かれている」とあり、工兵隊か第 5 中隊どちらかの関係者である。また、文章中に「ゴルトシュミット後備副曹長」、「トレンブルク中尉殿」と記しており、「殿」の有無から、自身の階級は中尉より下、副曹長以上であると推察される。また、「私

が第１兵舎に入るとすぐ、早くも楽団が私のほうに向かって快活な行進曲を朗々と演奏した。」とあり、かなりの有名人であると思われる。

② 1919 年８月号に「記念碑の除幕式」を寄稿している[16]。これは、現在ドイツ村公園にあるドイツ兵の慰霊碑が建てられた時の式典の様子を書いたもので、この大事な式典の寄稿文を任されたということは、相当に信望のある人物であろう。また文章中に「クレーマン少佐殿が記念碑を引き継ぎ、コッホ予備役伍長と」とあり、「殿」の有無から本人の階級は少佐未満、伍長以上であると推察される。

③ 1919 年９月号に「部隊の輸送についてのささやかな案内」を寄稿している[17]。それによると「膠州にかかわる七回の輸送」に参加したことがある。

以上のことから M.B.について次のようにまとめられる。

・名前の頭文字が M.B.の可能性がある。

・階級は副曹長以上で少尉より下である。よって副曹長、曹長、少尉のいずれかである。

・工兵隊または第５中隊の関係者である。

・膠州での任務にあたった。

・相当な有名人であり、仲間から尊敬されている。

これらに該当する人物を俘虜名簿[5]から探した結果、全てに当てはまるのはマックス・ブンゲ（Max Bunge）だけであった。彼は俘虜になった時、第 7 中隊の曹長であったが、かつて第 5 中隊に所属したことがある。彼の略歴を記しておくと、まず志願兵となり青島に派遣された。義和団や農民たちとドイツ兵が衝突した際には、高密城に忍び込んで城門を開け、高密の官人との交渉を導くことに成功し、青島のドイツ人社会で有名人となった。また、第一次世界大戦が勃発し、青島で日本軍との戦闘が起きた際には、前線を突破して日本軍陣地を偵察して報告した他、青島陥落前夜に部隊に歌を歌うよう励ました。1915 年に刊行された“Die Helden von Tsingtau（チンタオの英雄たち）”[18]や“Aus dem belagerten Tsingtau”[19]に彼の名前が登場する。また、自らも 1914 年に『膠州の 1898 年から 1901 年』という本を出版し、これは板東俘虜収容所でも買うことができた[20]。

ブンゲは、収容所から解放されてドイツに戻ってから郷里のハイリゲンハーフェン（Heiligenhafen）の町長を 1933 年から 1945 年にかけて務めた。ハイリゲンハーフェン町に彼の情報について問い合わせたところ、彼は住民から「MB 父さん」という呼び名で慕われていたことが分かり[6]、板東で用いていた“MB”というペンネームと一致した。

このようにマックス・ブンゲは傑出した人物であり、収容所内でも有名人であった。彼が今日にいたるまで注目されてこなかったのは、M.B.署名の寄稿文以外にはほとんど『ディ・バラッケ』に登場してこないことが大きな理由であったと考えられる。実名で登場するのは、1918年3月8日～19日に板東公会堂で開催された展覧会において油絵で三等賞をとったことと、同展覧会の準備において「ブンゲ曹長は弟と一緒に計画を立て、ごく短時間で冷たい木造の小屋をかなり趣味のよい快適な明るい美術ホールに塗り変えた。」と書かれているのみである[14]。

5. ドイツ兵が去った後

ドイツ兵たちの橋造り・公園造りは、住民にとっても関心事であった。ドイッチュマンの「二年間の橋梁建設」によれば、15 mの木橋を造った時には、完成前から20人ほどが橋のたもとに立って、利用できないかと待ち構えていた。また、ドイツ橋の完成間近の時の様子についても次のように書いている。

「日本人の住民たちも、この橋ができたのには強い関心を持った。毎日大麻神社で何より

も捕虜たちが早く帰れるようにと祈ってくれている老婆たちのほかに、付近の多くの住民がやってきては、橋を見て感心するのだった。7月27日に橋の要石がはめ込まれたときには、橋造りたちにとても好かれ、待ち焦がれられていた「美しき水車小屋の娘」が現れた。即席でおこなわれたささやかな祝典（水車小屋の娘のためではないが）では、よろよろした老宮司が不思議なことにものすごい力で重い石の槌を三度振りおろして要石を打った。そのとき彼は、この橋が50万年もちますようにという祈願を述べた。」

ドイツ兵たちにとって、このような住民の期待は無報酬の作業を続けるうえで励みとなり、自分たちが去った後でも住民が役立ててくれるだろうと期待している者もいたことだろう。しかし、ドイッチュマンは「これらの施設はすべてずっと利用されつづけると思う人もいるだろうが、それは当たらない。というのも、もし橋造りたちがその後の維持にも配慮しなければ、多くの道には今頃もとのように草が生い茂っていると思われるからである。」と書いている。築城少尉であるドイッチュマンは、このような土木工事の専門家であり、放っておけばすぐに荒廃していくことを理解していた。

では、ドイツ兵たちが去った後、彼らが造った道や建造物はどうなったのであろうか。ヴェルサイユ条約の締結により俘虜たちは解放されることになり、1919年12月末から翌年1月末の間に彼らは収容所から去って行った。それから17年後の昭和11年（1936）に刊行された『徳島縣新名勝案内』には、「社の裏には獨逸捕虜の架したる石橋獨逸橋がある」と記されており[21]、この時には獨逸橋（ドイツ橋）と呼ばれ名所になってことが分かる。現在のドイツ橋の傍らは古い石柱が置かれており、その表面には三方に「獨逸橋」「どい津橋」「DEUTSCHE BRÜCKE」とそれぞれ刻まれている（図13）。この石柱がいつ造られたものかは不明である。

大麻比古神社は、昭和45年（1970）に内拝殿・外拝殿・祝詞殿を築造したが、その前後に境内北部の林地の整備も行なわれ、ドイツ橋やめがね橋と池（心願の鏡池）およびそれらを結ぶ領域に手が加えられた。古老の話によれば、めがね橋と池の周囲は木々に埋もれており、池の水は自然の流

図 13　ドイツ橋の側の石柱

石柱の三方に「獨逸橋」「どい津橋」「DEUTSCHE BRÜCKE」と刻まれている。台座部分は後年に取り付けられたものである。

a

b

c

図 14　境内北部の道

a は道⑤上から道④と交わる所に向かって撮影した。b は道④を北側に向かって撮影した。c は道③を東に向かって撮影した。

路であった。池は平成に入ってからさらに整えられ、現在、池の水はホースから給水されているが、池の北側に以前の流路と思われる石組みのある溝が少し残っている（図12の溝③）。また、昭和40年代の整備の際に、現在に残る丸山の遊歩道も整備された。古老の話では、この道はドイツ兵が造った痕跡はなく、当時新たに造ったものとのことである。一方、丸山を含む境内北西部の一角の境内の敷地の境界沿いの道（図8の道①）は、古境内図に描かれていることからドイツ兵が造ったものと思われるが、昭和40年代には再整備されず、現在はその痕跡も分らなくなっている。一方、北東部の林地の中央を東西に横切る道③は、現在の境内図（図4）には載っていないものの、道④⑤とともにドイツ兵の作った道が残っていると考えられる（図8）。図14は、ドイツ兵が作ったと考えられる道③④⑤の写真を示す。これらの道は、細長く加工された石で縁が築かれている点で共通しているが、道の内側をみると、道⑤ではこぶし大の石がびっしりと敷き詰められているのに対して（写真a）、道③④ではそれより大きな石がまばらに埋まっている（写真b、c）。ドイツ兵が敷いた道がどの程度保存されているかは不明であるが、道⑤の場合は、その後新たに石を敷

きつめたものと考えられる。

ドイツ兵が愛したここの境内北部の林は、林相も変化した。松や檜が優占していたが、松は全国に蔓延した松枯れによりほとんど消滅した。替わりに檜とともに楠やヤマモモが茂る森となっている。また桜や楓も植えられた。ドイツ兵の記録には描かれておらず、古境内図にも示されていないことから、植えられたのは古境内図の作成以降であろう。

6. 終りに

以上述べてきたように、板東俘虜収容所のドイツ兵は、大麻比古神社の境内に 6 つの木橋、4 つの石橋を架け、総延長 1.1 km の道を整備し、さらに石の堤防、傾斜路、石段を築いた。石は自分たちで運び、木も自分たちで伐った。乏しい道具（一本の鋸と釿（ちょうな）、いくつかのシャベルとつるはし）と少ない人数で、2 年間でこれだけのものを造ったことは驚嘆に値する。これらの橋や公園を設計し、作業の指揮をとったドイッチュマン築城少尉は、これらの作業を記録した「二年間の橋梁建設」[2] の中で、この作業の意義について「心身の健康の維持と強化、創造の喜びと労働への意欲、これらが無償の橋造りによって獲得できた財産」であったと記している。また、彼は地元住民に対しても、「日本のものとは異なる建築法であること、またそれがドイツの戦争捕虜によってすすんで無償で実行されたということによって、この地方にかかるこの橋はとにかくなにがしかの意義をもつのだ。」と記している。ドイツ橋は今日まで残り、まさしく彼が思っていたように、徳島の国際交流を象徴する史跡として徳島県指定史跡となっている。また、めがね橋と鏡池も名所となっている。これらは、ドイツ兵が境内の森の自然を愛し、公園とするために築いたものである。本研究では、これらの他にも林内の道や椎尾谷川の河岸の石段に彼らが築いたものの痕跡が残っている可能性が高いことを示した。これらについてもドイツ兵が日本の自然を愛した証しとして 2 つの石橋とともに保存しておくべきであると考える。

ここの自然を愛したのはもちろんドイツ兵だけではない。丸山の頂上には 2 つの神社が存在するが、古くから神域として守られていたことが、ドイツ兵の心を惹きつけることになったことは間違いない。ドイツ兵は、日本の宗教を尊重したのであろうか、丸山の周りの整備はしたが、丸山自体には手をつけなかったようだ。現在の丸山の麓から山頂を巡る遊歩道や滑り台は、昭和 40 年代に地元有志により造られ、憩いの場となった。また、ドイツ兵が造ったドイツ橋、メガネ橋、心願の鏡池一帯、そしてそれらを結ぶ道もその時に再整備された。ドイツ兵の足跡を正確に歴史に残すためには、ドイツ兵が造った部分と、その後に新たに造られたものをきちんと把握しておく必要があり、本研究がその一助となれば幸いである。

また、本研究では、橋造り・公園造りに携わったメンバーの中にマックス・ブンゲ曹長がいたことを明らかにした。彼は俘虜となる前は青島のドイツ人社会で英雄と讃えられた人物であり、板東俘虜収容所から解放された後は、故郷のハイリゲンハーフェンに戻り、町長を 12 年務めた。これは、ドイツ兵たちが残した物を語るうえで、歴史を彩る 1 つのエピソードとなるだろう。さらには、当地とハイリゲンハーフェン町との新たな交流の誕生にも期待したい。

謝辞

本研究にあたり、大麻比古神社の歴史についてご教示を賜った大麻比古神社名誉宮司・金倉文雄様、聞き取り調査にご協力を賜った麻田功様、有益なご助言を賜った鳴門市教育委員会の森清治様および木屋平八幡神社宮司・天毎木孝利様に深く感謝いたします。そして、調査の間絶えず惜しみないご協力を賜った大麻比古神社宮司・圓藤恭久様をはじめ、大麻比古神社権禰宜・金倉卓彦様ならびに同神社の職員の皆様にも深く感謝いたします。

註

1）『ディ・バラッケ（Die Baracke）』は 1917 年 9 月 30 日に第 1 号が発行され、1919 年の 3

月の第 26 号（通算 79 号）まで週刊で発行され、半年毎に 3 巻にまとめられて収容所内で販売されていた。1919 年 4 月からは月刊となり、8 月号まで毎月発行された。また、タイトルを改めて『帰国航』が帰国船の中で 6 号まで発行された。これらは鳴門市ドイツ館史料研究会により翻訳が進められ、第 1 巻が 1998 年に、第 2 巻が 1991 年に、第 3 巻が 2005 年に刊行された。1919 年 4 月以降については 2 ヶ月分をまとめて 3 分冊にしたものが第 4 巻として 2007 年に刊行された。また、鳴門市ドイツ館では原文を訳さずにドイツ語のまま活字化して PDF にした CD『Die Baracke Band I-Band IV』を 2006 年に作成し、同館で販売している.

2）ペンネーム“A. Dt.”による「二年間の橋梁建設」と題された寄稿文に橋造り・公園造りの詳細が記されている。鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集.『ディ・バラッケ（1919 年 4 月～9 月・帰国航　第 3 分冊（9 月号・帰国航））』.鳴門市発行. p462-470.（2007）

3）ペンネーム“M.B.”による「大麻神社境内の秋の気分」と題された寄稿文であり、註 1)のドイッチュマンの寄稿文と一緒に掲載されている。鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集.『ディ・バラッケ（1919 年 4 月～9 月・帰国航 第 3 分冊（9 月号・帰国航））』.鳴門市発行. p460-462.（2007）

4）ペンネーム M.B.による「記念碑の除幕式」. 鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集.『ディ・バラッケ（1919 年 4 月～9 月・帰国航　第 3 分冊（9 月号・帰国航））』.鳴門市発行.　p418−421. (2007)

5）以下の2つのウェブサイトに青島戦で俘虜となったドイツ兵に関するプロフィールが載っている。

・ チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会（http://homepage3.nifty.com/akagaki/index b.html）

・チンタオ・ドイツ兵俘虜に関するドイツの研究家Hans-Joachim Schmidt氏のHP（http://www.tsingtau.info）

6）ハイリゲンハーフェン町のホームページ中に投書欄があり、マックス・ブンゲに関する情報を教えてほしいと書き込みをしたところ、町長から E-mail で届いた返信に記されていた。

7）『日刊電報通信（Tägliche Telegrammdienst Bando）』は、ドイツ日本研究所（Deutsches Institut für Japanstudie）図書室に所蔵されている。ホームページへの公開作業が進行中だが（http://bando.dijtokyo.org/?page=reihe_detail.php&p_id=1&menu=2）、該当部分は未公開である。そこで、該当部分は、図書室担当者に写真を撮影していただき、その内容を確認した。

8）『ディ・バラッケ』第 1 巻第 10 号の「収容所日誌」（鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集. 鳴門市　発行. 鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集. 鳴門市発行. p1-8.（1998））

9）林啓介『板東俘虜収容所』.南海ブックス. p167.（1978）

10）「われわれの遠足」は 1919 年 2 月 23 日の『ディ・バラッケ』に掲載されている（第 3 巻第 21 号（通巻第 74 号, p323-328）。「大麻公園」という言葉は p326 に使われていて、原文では“Oasa-Parkes”である（“Die Baracke” Band III, p388）。

11）ペンネーム “F.”による寄稿文「木こり団創設 1 周年に寄せて」及びペンネーム“S.”による寄稿文「地学巡検 第 3 部（大麻神社周辺）」に橋の大まかな位置が分かる地図が載っている。前者は 1919 年 2 月 2 日の『ディ・バラッケ』（第 3 巻 p263-270）、後者は 1918 年 10 月 20 日の『ディ・バラッケ』（第 3 巻 p33-39）に掲載されて

いる。

12）ヨハン・グレーゴルチック（Johann Gregorczyk）の所持していたアルバムが、ひ孫にあたるGregor氏に伝わっており、そのコピーがルール大学ボーフムのJan Schmidt博士らを介して鳴門市ドイツ館に収められた。本稿はそれを用いている。

13）ペンネーム“dt”による寄稿文「板東公会堂での絵画と工芸品展覧会」．『ディ・バラッケ』第1巻第25号 板東俘虜収容所 1918年3月17日．鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集．鳴門市発行．p324-329．（橋作りの人はp325）(1998)。この展覧会は1918年3月8日～19日に開催され、地元住民も大勢集まった。カルステン・ズーアやマックス・ブンゲも絵画を出品した。

14)ドイツ橋やめがね橋の作製について多数の資料や書籍で触れられているが、ドイッチュマンが設計や指揮を担当したことを明記してあるのは多くない。筆者が確認できたのは註5に挙げた資料の他には、以下の通りである。鳴門市教育委員会編集・発行『板東俘虜収容所跡調査報告書―鳴門市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告所8』(2012)、棟田博著『板東捕虜収容所 愛の灯は消えず』国土社(1974)、棟田博著『板東捕虜収容所物語』光人社(2006)、田村一郎「『バラッケ』の「漫筆あれこれ（その 1)」青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究．第11号．p45-51(2014)

15）ペンネーム“M.B.”による寄稿文「1918年1月 26 日の第 5 中隊と工兵中隊の皇帝誕生日祝典」．『ディ・バラッケ』第1巻．鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集．鳴門市　発行．鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集．鳴門市発行．p248–252. (1998)

16）ペンネーム“M.B.”による寄稿文「記念碑の除幕式」．『ディ・バラッケ』第2巻．鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集．鳴門市　発行．鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集．鳴門市発行．p418–421．(1991)

17）ペンネーム“M.B.”による寄稿文「部隊の輸送についてのささやかな案内」．『ディ・バラッケ』第4巻．1919年4月～9月・帰国航　第3分冊（9月号・帰国航）．鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集．鳴門市　発行．鳴門市ドイツ館史料研究会翻訳・編集．鳴門市発行．p480–487. (2007)

18）Otto von Gottberg, “Die Helden von Tsingtau”, Verlag Ullstein, Berlin,1915.

19) Carl Johannes Voskamp, “Aus dem belagerten Tsingtau”, Buchh. der Berliner Evang. Missionsges., 1915

20）収容所内新聞『日刊電報通信』1919年6月22日（第66号）にM. ブンゲ著『1898/1901年の、戦中と平和時の海軍歩兵第3大隊のもとで。ある旧海兵の回想録』が収容所印刷所にて30銭で販売されることが告知されている。

21）阿波名勝會著作・発行『徳島縣新名勝案内』．昭和11年（1936）。該当箇所は80頁に記されている。

論文受付：2015年8月28日
論文受理：2015年9月11日